

ESD雑穀プロジェクト(1)

－「心の支えとなる‘ふるさと’像の育成を目指す」洞川中学校の取り組みから学ぶ－

川内充延

(天川村立洞川中学校)

竹村景生、山本浩大、佐竹 靖、富山敦史

(奈良教育大学 附属中学校)

森島敏彦

(天川村立洞川中学校・校長)

松川利広

(奈良教育大学 教職開発講座(教職大学院))

谷口義昭

(奈良教育大学 技術教育講座(技術科教育))

ESD cereals project

The measure of the Dorogawa junior high school "which aims at training of the 'home country' image used as a support of the heart" teaches.

Mitunobu KAWAUCHI

(Dorogawa Junior High school in Tenkawa Village)

Kageki TAKEMURA、Koudai YAMAMOTO・Yasushi SATAKE・Atushi TOMIYAMA

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Toshihiko MORISHIMA

(Dorogawa Junior High school in Tenkawa Village)

Toshihiro MATUKAWA・Yoshiaki TANIGUTI

(Nara University of Education)

要旨: 統廃合の計画が出ている洞川中学校が、子どもたちの「ふるさと」像の育成を柱に地域協力を得てESDに取り組み始めた。奈良教育大学附属中学校と裏山クラブのESDの実践の成果(米プロジェクト等)と洞川中学校のふるさと学習に学ぶ取り組みを交流しながら、雑穀をテーマにESDの実践をどのように組み立て、互いが協働で地域の課題に迫れるかを考察する試み(1年次)の報告である。

キーワード: ESD 雑穀 Cereals ふるさとHome country 地域遺産A local inheritance

1. はじめに

今日、私たちは環境破壊や地球温暖化、経済格差に代表されるような持続不可能な地球規模の問題に直面している。ESDは「Think globally、act locally」と言われるように、もはや地球規模で成り立っている私たちの暮らしのあり方を見直し、私たちの生活環境である地域での生き方や地域のあり方を考え直してみようという、価値転換の教育として捉えられている。

しかし、この地球規模の課題は、私たちの実感としては、地球温暖化の影響と言われる昨今の「異常気象」

や、3.11以降のエネルギー問題としては理解されるのではあるが、そのことが生活の価値観の転換や行動の変革になるところにはいたっておらず、未だ「学習活動」としてとどまっている、または受身的になっているのが現状ではないだろうか。

洞川中学校では、学校をあげてESDに取り組みようと本年度より研究体制がつけられることになった。そこに、奈良教育大学附属中学校研究推進部ならびに裏山クラブが関わる機会を頂いた。また、時を同じくして奈良教育大学においては、ユネスコクラブのメンバーが洞川中学校のESDの活動に参画することになった。

洞川中学校の取り組みは、「Think locally、act locally」、すなわち「地域で(を)考え、地域で行動する」という内容であり、総合的な学習の時間で取り組まれた内容は、「社会的共通資本」(宇沢2010)の学びといえる。

他方奈良教育大学附属中学校(以下附属中学校)は、洞川中学校と違い多様な地域から集まった生徒によって構成された学校である。この間、竹村(2012)は「地域」から発想するESDの取り組みを本紀要に報告してきたが、そこには「地域で(を)考え、地域で行動する」までは可能ではあったが、卒業した彼らが地元に戻ることで完結してしまい、彼らのその後の展開(「地域で育ち、地域が育つ」、即ち地元をデザインする主体)の看取りができないという実践の課題もまた痛感していた。

しかし、この悩みは私たちだけの悩みではなく、比較的共同体意識が残る山間の小規模校である洞川中学校でもまた、同様の悩みを抱えていたことを私たちは今回の交流によって知ることが出来たのである。そのため、お互いの資源(附属中学校はESD実践の蓄積を、洞川中学校はふるさと学習の「種」である雑穀を)「わかちあう」ことから始まったのが、この雑穀プログラムの第1年次である。地域を知ることから始まるESDにおいて、小さな雑穀の種が持つ価値とは何かを考えていきたい。

2. 洞川中学校のふる里像 ～天川村の概要～

(1) 村の自然

天川村は、奈良県のほぼ南半分を占める吉野郡の中央部に位置するとともに、紀伊山地主部にあたる吉野山地の中心に立地している。吉野山地の主脈であり、「近畿の屋根」とされる大峯山脈が本村の東部に連なり、北境および南境もこの支脈によって形づくられ、西端は天ノ川の流出口になっている。

村の周囲は、1500m～1900mの高山が十数峰ある深山帯に属しているため、気候は低温多湿で、降雨量は比較的多い。夏季は冷涼で、天然記念物であるオオヤマレンゲやトウヒ、シラビソの原生林など特異な植生も見られる。村の面積の約4分の1が吉野熊野国立公園に指定されている。

(2) 村の生い立ち

天川村は、高い山と深い谷によって形成されており、冬季がきわめて寒冷であるため、古くは人々が定住するにはいたらなかった。また、耕地に適した地形が少ないことも先住者を妨げた。より高地にあり、より清浄な環境は、修行者たちの「行場」を開ききっかけとなり、約1300年前に役行者により大峯開山がなされた。以来、人々の定住を促すことになり、山岳修験の根本道場となった。

2013年7月31日現在、天川村の人口は1639人で、世帯数は729戸となる。65歳以上の全人口に対する割合は43%

である。また洞川中学校のある洞川地区の人口は668人で、世帯数は271軒となる。

(3) 世界文化遺産

2004年7月、奈良県、三重県、和歌山県にまたがる紀伊半島一帯の、吉野・大峯、熊野三山、高野山という三つの霊場と大峯修行道(大峯奥駈道)、熊野参詣道(熊野古道)、高野山町石道という三つの参詣道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコ世界文化遺産に登録された。日本では12番目、道としての登録は世界でスペインとフランスを結ぶ「巡礼の道」とこだけである。

洞川地区は十津川の上流、大峯山に源を発する山上川をはさんで、標高820m余りの高地に旅館・民宿が20数軒と、土産物店や陀羅尼助丸を製造販売する店13軒や各種の商店が軒を連ねている。このことから分かるように、洞川地区の経済基盤は観光産業にある。

以前、洞川地区は、夏場に日本の各地から多くの参詣者を迎え、冬場は洞川の宿や陀羅尼助商(陀羅尼助の売薬に携わる)の人たちが諸国の顧客廻りをしてきた時代があった。このように外部との接触が極めて多かったにもかかわらず、洞川地区には強い訛りや特別な語彙がある。つまり、洞川地区は外部に広く開かれていながら、一面強い閉鎖性を持っていたということである。

3. 洞川中学校の概要

生徒数は減少傾向にある。今年度は、1年生が2名(男1、女1)、2年生が6名(男4、女2)、3年生が6名(男3、女3)となり、全校生徒は14名である。参考までに、今年度の洞川地区の園児・児童・生徒数の一覧を次に示しておく。

4歳児	4名	小学4年生	5名
5歳児	1名	小学5年生	5名
6歳児	4名	小学6年生	4名
小学1年生	4名	中学1年生	2名
小学2年生	2名	中学2年生	6名
小学3年生	4名	中学3年生	6名

4. 持続発展教育(ESD)の視点の導入

(1) 洞川中学校における持続発展教育

学校行事や総合的な学習の時間の取り組みをつなげてみると、洞川中学校の教育活動には「ふるさと」というキーワードが浮かび上がってくる。そこでは学校内、家族内、地区内と、様々な人々とのつながりから得られる経験が不可欠で、生徒一人ひとりが自分なりの「ふるさと」像を築き上げてきたように思える。

しかし、その「ふるさと」像は、村を離れて思うふるさとの記憶ではない。子どもたちが「ふるさと」に戻り、村の持

統的發展を構想できる力となって協働で育んでいく地域資源(資産)である。このような「ふるさと」像を築き上げていくために、私たちはユネスコが進める『持続発展教育(ESD)』の基本的な考え方に注目した。特に私たちはESDの次の2つの観点を拠り所としている。

- ・ 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- ・ 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むこと

これらの観点から、「世界遺産や地域の文化財等に関する教育」「環境教育」「保護者や地域と連携した教育」を洞川中学校における持続発展教育の3本柱として、今年度の取組を次のようにあてはめてみた。当然のことながら、3本柱の境界線は引けるものではなく、内容の重点において分けている。

① 世界遺産や地域の文化財等に関する教育

- ・ 1、2年校外学習(法隆寺、中宮寺) (5月23日)
- ・ 三宝院入峯への参加 (6月7日)
- ・ ふるさと学習(龍泉寺院主さんのお話) (6月19日)
- ・ 行者祭への参加 (8月2日、3日)
- ・ 1年探究学習(役の行者さんについて) (4月~11月)

② 環境教育

- ・ 勤労生産学習 (4月~11月)
- ・ 国語科「水の作文」 (5月)
- ・ 理科「自由研究」 (夏休み)
- ・ 美術科「洞川の風景」(写生) (2学期)
- ・ 花いっぱい運動 (5月~7月)
- ・ 清掃ボランティア (7月12日)
- ・ スキー教室 (1月23日、2月7日)

③ 保護者や地域と連携した教育

- ・ ふるさと学習(魚のつかみ取り体験) (7月12日)
- ・ 職場体験 (夏休み)
- ・ ふれあい体育祭 (9月14日)
- ・ ふれあいグランドゴルフ (10月10日)
- ・ 学習発表会 (11月15日)
- ・ 天川中学校との交流会 (随時)

加えて、この3本柱は、桑子(2008)の「ふるさとの見分け方(空間の価値構造認識法)」に関連づけることができる。この方法は、次の3点から構成される。

- 空間の構造を認識する
- 空間の履歴を掘り起こす
- 人びとの関心・懸念を把握する

i) は、対象となる地域を含む空間の構造を明らかにすることである。この構造とは、海岸、河川、山岳、道路など地形の骨格、特に水環境によって形成された空間要素の配置関係となる。先の3本柱では、「環境教育」に関連する。

ii) は、対象となる地域の空間の履歴を明らかにすることである。この履歴とは、生態系と人びとの生活・活動・

文化の歴史的全体像を基礎とし、それが現在の状況にどのようにつながっているか、また将来どのようになってゆくかを考察することである。先の3本柱では、「世界遺産や地域の文化財等に関する教育」に関連する。

iii) は、i) と ii) より、古代から連綿と続く地域での生活において、そこに暮らす人びとが何に関心を持ち、何を心配していたかを知った上で、現在居住する人びとが何に関心を持ち、何を心配しているのかを把握することである。先の3本柱では、「保護者や地域と連携した教育」に関連する。

この「ふるさとの見分け方」は、地域空間の価値を認識するための方法である。この「見分け方」に子どもたちが習熟することによって、将来子どもたちが次世代のふるさとをつくっていくために必要な合意形成のツールとなるものとする。

(2) 奈良教育大学ユネスコクラブの訪問交流

今年度初め、洞川中学校の教育の特色を持続発展教育の視点で捉え直そうとしているとき、奈良教育大学ユネスコクラブ(学生団体の1つ)から訪問交流の申し出があった。彼らの訪問目的は、地域と連携した教育活動を体感すること、またユネスコクラブが持っている知識や技能を提供することにある。月に2回程度、学校行事や総合的な学習の時間(1年)を中心に訪問交流を行っている。

5. 'ふるさと'像を育む実践事例

(1) 学校行事

① ふれあい体育祭

洞川地区の住民が参加し、年間を通して洞川中学校最大の学校行事である。生徒作成の案内ちらしを各戸に配るなどして、地区全体に参加を呼び掛ける。子どもたちのために地区が一体となって盛り上がる。

② 学習発表会

年度当初から取り組んできた「総合的な学習の時間」の成果を発表することを中心に、音楽やダンスの発表、書道や美術、科学作品の展示も行われる。洞川中学校にとっては、ふれあい体育祭と同様に核となる行事である。

(2) 総合的な学習の時間

① 探究学習

各学年でテーマを設定し、それに沿って約半年間をかけて探究活動を行っていく。テーマを設定する際には、内容、動機、目的、方法、計画を明確にし、限られた時間を利用して最大限の成果を出せるように検討を積み重ねる。また、1年生は洞川について探究することが慣例となっている。

昨年度の1年生のテーマは「洞川の昔の食べ物」で

あった。生徒たちの振り返りを次に掲載しておく。

- ・雑穀の育ち方、食べ物の大切さなどがわかった。僕たちの作った雑穀がとてもおいしい団子になってうれしかった。
- ・畑を作るとき、草を抜いたり、土を耕したりするのが大変だった。芽が出たときや実ができたときはとてもうれしかったし、種まきはおもしろかった。
- ・畑作りや雑穀の栽培はしんどく、大変なことがたくさんありました。でも、一年生みんなで楽しく、一つになってすることができてよかったです。
- ・多くの人に助けられて、この作品をつくることができました。洞川、天川の資料をまとめて、新しい発見ができて、一段と村についての関心が強くなりました。
- ・畑作りから収穫までかなり時間がかかったけど、元気な雑穀ができてよかったです。とうきび団子は甘くておいしいので、僕のおすすめです。
- ・戦争の時の食べ物について、いろいろわからないことを教えてもらい、ありがとうございました。作業がしんどかったけど、みんなで楽しくやれました。

② 勤労生産学習

自分たちで農作物を栽培し、その苦労や喜びを味わうとともに、食の安全について意識を高めることをねらいとして毎年取り組んでいる。全校体制で栽培する農作物や、学年をこえた縦割りグループを3つ作り、グループごとに栽培する農作物がある。収穫した農作物は、主に給食の食材となるが、各自で持ち帰ったり、昨年度は生徒会主催の高齢者との親睦会にも用いられた。

③ ふるさと学習

洞川地区だけでなく、天川村全体を対象に、地元のことをよりよく知ろうという取組になる。年3回程度で、職員研修も兼ねる。

(3) 地区行事

① 少年消防隊夜回り

洞川地区では過去に3度の大火事に見舞われている。昭和21年2月3日には22軒の家が燃え、さらに同年3月31日には126軒（龍泉寺を含む）の家が燃えるという大火事があった。そして再び昭和29年には22軒の家が燃えるという大火事があった。そのような経緯から、昭和23年より少年消防隊が結成され、以来防火活動に取り組んでいる。

② 行者祭

洞川地区最大のお祭りである。伊豆大島への島流しの刑に処せられていた役行者の無実が判り、伊豆大島から

帰られたことをお祝いしたのがこのお祭りの始まりである。洞川中学校の生徒も鬼踊りや高張り提灯行列、ひょっとこ踊りや阿波踊り、民芸会の笛や太鼓など、何らかの形でお祭りに参加する。今年度は奈良教育大学ユネスコクラブ7名の参加もあり、生徒たちがふるさと像を築き上げていく上で、良い影響を与える存在になることを期待している。

6. 奈良教育大学附属中学校との雑穀交流学習

以上の洞川中学校の「ふるさと」像の育成を目指すESDの核に、私たちは『雑穀』（地元の方は「ごこく」と呼ぶ）があることに気付かされた。天川村は今でこそわずかながらの水田はあるが、日照時間が短く水が冷たい条件下の稲作は難しく、村のいのちを支えたのは雑穀（アワ・ヒエ・トウキビ・ソバ・大豆等の五穀類）であった。洞川中学校がその栽培を先述のように総合的な学習や日常活動に位置づけているのも頷ける。

奈良教育大学附属中学校裏山クラブは「雑穀交流」を通じて、ESDにおける「いのちが躍動するふるさとの創造的継承」を位置づけ、今年度の交流行事を、以下のように取り組んだ。

- 4月 雑穀 種の譲り受け
- 5月 中庭畑に播種（アワ・ヒエ・キビ・ソバ）
- 6月 洞川中学校ESD研修会（竹村が講師ならびに公開授業）
- 8月 教育科学研究会全国大会で取り組み発表
川内（洞川中学校）、中澤（奈良教育大学ユネスコクラブ）、竹村（附属中学校）



附属中学校中庭で育つ蕎麦とアワキビの雑穀



9月 雑穀収穫（附属中学校 中庭）



11月 雑穀と山里の生活文化現地学習交流会

【天川地区森田久勝さんより雑穀と山里の暮らしと栽培についての話を伺う】

両校の生徒の交流にどうして「雑穀」を位置づけたのか。それは、雑穀は地域の暮らしのかたち、折りのかたち、地域の特性（地理的環境）を反映しているからである。そのことは、洞川中学校の生徒にはいのちを育ててきた場所への「気付き」を促すことになり、他方裏山クラブの生徒には、風土に根ざした食文化の多様性を理解する中から「もう一つの生き方」が「ある」ということへの気付きとなるからであり、それが「実感できるESD」であると、天川村の語り部である森田さんのお話から確信できたからである。



【洞川中学校訪問】

【森田さん宅で雑穀をいただく】

7. まとめと今後の課題

最後に、この雑穀交流での生徒の感想を紹介したい。

雑穀は、昔から人の生活に関わっていたことがよくわかりました。また、種類の多いことも知りました。ほくも、白米に混ぜて炊くタイプの雑穀はよく食べています。色も鮮やかで見た目も良く食欲もそそのので、好物です。母から雑穀は意外と少ししか入っていないのに高価だと、聞いたこともあります。栄養もあるので、またすすんで食べてみたいと、なおさら感じました。また、はじめて頂いた、猪のお肉がとても美味しかったことに、感動しました。聞いたことはあったけど、食べたことがなかったので、とても嬉しかったです。同じ奈良県内でも、気温差や環境の差、自然の差があることを再確認しました。

（附属中学校M君 中2）

本日参加して森田さんからたくさんのことを学びました。1つ目は雑穀の背の高さや粒の大きさについてです。トウキビは2メートルぐらいある背丈だったのでとてもびっくりしました。学校で育てていた雑穀は大きくなっても1.5メートルぐらいで雑穀としては大きい方かなと思っていたので、とても大きく感じました。また雑穀は粒がとても小さいイメージを持っていましたが、トウキビは1つ1つの大きさが3ミリ~5ミリ程度もあって大きい粒の品種もあることがわかりました。トウキビは食べられるところ以外にも茎の部分はほうきにして有効活用することがわかり、昔の人はアイデアを出して日用品を作っていたのですごいと思いました。2つ目は森田さんの倉庫からです。たくさんの道具があって、その中でも数本あったとても大きなこぎりにはとてもびっくりしました。今まで裏山クラブや祖父の家などでものこぎりを使ってきましたが、倉庫にあった四分の一にも満たない大きさの物だったので、一回使ってみたいと思いました。あれだけのこぎりが大きいと、切る木も大きなものになると思うので、昔はとても大きな木を切っていたのだと考えました。また、昔のリュックも見せていただいて肩にかけるひもがとても細くて力がかかり、山での仕事なので持っていく物も多くて大変だったことがわかりました。今回のお話をお聞きして雑穀を育てることは手間がかかるけれどもとても面白くて楽しいことだとわかったので来年からは学校でももっと多くの種類を育てたいと思いました。

（附属中学校T君 中2）

洞川中学校と附属中学校では、一人ひとりの内面に築き上げられる‘ふるさと’像には、共通するものもあればそうでないものもある。この雑穀プロジェクトでの取り組みが、生徒たちの未来に育つ種子となり、彼らの心の支えとなる‘創造的なふるさと’像を育てていることを願わずにはいられない。

本プロジェクトでは、生徒たちの声や感想文などで持続発展する‘ふるさと’像を築き上げるきっかけとなる言葉にたくさん出会った。「わかった」「知らなかった」という言葉からは新しい発見や気付きが、「きれい」「豊か」「よごれている」という言葉からは自然や生活環境へのまなざしが、「ありがとう」「笑顔」という言葉からは地区の人たちとの交流が、「みんなでやれば」「みんなのおかげで」「役に立つ」という言葉からは相互扶助の共同体への意識が、「うれしい」「楽しい」という言葉からは素朴な感動とふるさとへの肯定感が窺える。このような言葉が発せられる取り組みを丁寧に積み重ねることで、生徒一人ひとりの内面にESDの価値観に根ざした‘ふるさと’像が築き上げられるものと考えられる。

1年次の反省として、両校間の生徒たちの交流が、双方

の行事の調整のむつかしさもあったが、なによりも互いに遠隔地であること、それが気象条件にも影響を受けて心理的な距離の遠さを痛感させられたりもした。次年度は、ICTの活用も含めた雑穀プロジェクトを子どもたちと構想していきたい。

引用参考文献

- (1) 宇沢弘文編『社会的共通資本としての医療』東京大学出版会 2010
- (2) 竹村景生「中学校総合学習におけるESDの視点から提案型地域づくりの構想」『奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要』第21号 2012
- (3) 岸田定雄『洞川の民俗』豊住書店 1993
- (4) 桑子敏雄『日本文化の空間学』東信堂 2008
- (5) 五島敦子・関口知子『未来をつくる教育ESD』明石書店 2010
- (6) 天川村・天川を学ぶ会『天川村ガイドブック』（改訂版）奈良県天川村 2012
- (7) 増田昭子『雑穀の社会史』吉川弘文館 2001
- (8) 星野次汪・武田純一『進化する雑穀 ヒエ・アワ・キビ』農山漁村文化協会2013